

パネリスト報告 3

下田歌子と実践女子学園

湯浅 茂雄

ゆあさ・しげお／下田歌子研究所所長

下田歌子研究所の湯浅でございます。これから少し下田歌子、実践女子学園に寄せてお話をさせていただきますが、「寄せる」というのは、決して実践女子学園だけの話にならないだろうと思うからです。

実践女子学園はこれまでのお話にありましたように、近代女子教育の先駆者の一人でありました下田歌子によって、明治三十二

年（一八九九）に創立されております。この肖像写真は明治三十五年頃の
下田歌子です。撮影した小川一真
という人は、漱石の肖像写真などで
有名な写真家です。

実践女子学園は、最初ここ渋谷の





歌子、明治35年頃の肖像写真、小川一真撮影

地ではなく麹町元園町というところでスタートいたしました。今、麹町女子学園がその場所で教育を展開していますけれども、その後この渋谷の地に皇室の土地をいただいて、この常磐松でさらに大きく展開したというものです。明治三十二年創立ですので、その三年後ぐらいの先生のお姿ということでご紹介させていただきます。

下田歌子は一八五四年（安政元年）、諸外国と和親条約などが結ばれるその年に現在の岐阜県恵那市岩村という岩村藩の城下町に平尾録蔵りくぞうという儒学者、藩士の長女として生を受けました。

録蔵の考え方が藩の政策に合わず幽閉されており、清貧で苦しい生活を送っていました。明治政府になり許されて、録蔵が東京に職を得て、明治四年四月八日に岩村を発ちます。そのときに下田歌子が歌った歌、これは『東路之日記』という道中日記、歌日記でもありますが、そこに記されています。この『東路之日記』自体は戦災で焼失しておりますが、幸いなことに焼失前にすべて翻字され、一部写真が残っておりますので、読むことが可能です。ちょうどその東京方向と故郷を隔てる三国山を越えるときに詠んだ歌——我々は「綾錦の歌」と呼んでいますが——が、「綾錦

着て帰らずば 三国山 またふたたびは 越じとぞ思ふ」です。この歌を歌ってから二十八年後に実践女子学園を創立するわけですが、ここで表明された志というものは、生涯変わることはありませんでした。この歌を、下田を離れて詠めば、故郷に錦を飾る歌ですので、個人的な富や名声への渴望を読み取ることもできるかもしれませんが、そうではないことは下田歌子の生涯が証明しています。こういう動乱の時代、世の中がどうなるかわからないような時代に育った者として、社会に貢献し、その中で自己を実現しようとする決意を表明したものであります。私は、若き女性の高い志が本学園の原点であると、学生に伝えております。学生たちにも、自分だけのことを考えるのではなく、他を地域を社会を視野に入れて大きな目的を持つてほしいと思っていま

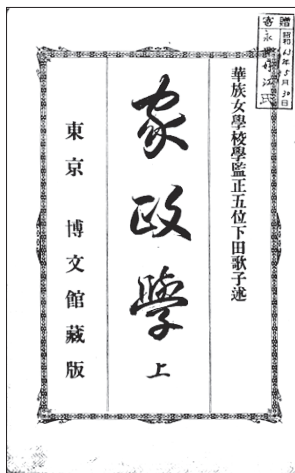


大講堂での『源氏物語』講義の様子

す。下田歌子の出発点でもあり、学園の出発点でもあり、大事な点かと思いい、紹介させていただきました。
下田は女子教育者であり、明治時代を代表する歌人でもありま

した。それから国文学者でもあり、このように大講堂をいっぱい埋めるような『源氏物語』講義を、まさにこの地、常盤松で行っていました。

それから、意外と知られていないことですが、下田は家政学者でもございます。家政学の教科書の表紙を載せましたけれども、これを明治二十六年に出版しております。この本は、日本で女性の手になる初めての家政学の教科書です。この時代すでに翻訳書はありましたが、下田の『家政学』は、みずから講義した内容の書き下ろしです。生活科学部——この大学でも昔は家政学部と申しましたけれども、そこでの学部構成、学科構成がすべてそこに入っているような内容です。下田は明治二十六年から二年間、欧米に女子教育視察の旅に出ますけれども、帰ってきてからは、その見識を入れて、『新撰家政学』という本を出版しており



下田歌子著『家政学』

ます。その中身は中国の実情に合わせ、中国でも翻訳され、出版されたものです。これが四つ目の顔です。

そして、最後に社会福祉事業家としての、特に大正期の愛国婦人会会長としての活動があります。我々もつい先年、大きな震災に遭いましたけれども、関東大震災後に際しては非常に大きな社会的な活動を、しかもかなり長いスパンで行いました。

下田は明治二十六年から二十八年にヨーロッパに教育視察に行くわけですが、このヨーロッパ視察を通じて、日本の一般子女教育への確信を深めます。もともとなぜヨーロッパに派遣されたかと申しますと、明治天皇の皇女の教育係に内定して、そのための研鑽として視察を命じられたわけです。ある意味で、その意に反することになったかもしれないけれども、優遇された立場の女性ではなくて、一般女性の教育をすることが、日本の国のためにぜひとも必要なのだという確信に至ることになります。

このとき、下田は佐々木高行という政府高官——下田のヨーロッパ派遣した主導した人物ですけれども——にこのような手紙を書いていきます。「今如此欧米列国、東洋の隙を伺いつつある時に於いて、みすみす漁夫利となすべき、(中略)かえすがえすも如斯硝煙砲声の間に兄弟の国たる日清相見の事に立至候事、残念千万に候。」

下田がイギリスに行っているときに日清戦争が起きています。まだ結果はわかっていませんけれども、下田はこのことを大変に残念がっています。国文学者ですので、中国との関係への想いはすごく深いのです。「兄弟の国」と清国を呼んでいて、この戦争を本当に嘆いています。すでにこういう戦争を起こしてしまったけれども、「何卒此後わが政府の充分強固に、百年の善後策を論ぜられ候事をのみ祈り入り候。」と述べ、これに続いて「私は百年の長計をたて候」と書いてあります。これが実践女子学園構想であります。

もうひとつ、これは谷干城という、当時貴族院議員を務めていた人物に宛てた手紙ですが、女性の目からの教育ということとを言っています。女子教育というのは、その国の基礎をよく見て研究しなければいけない、そのまま引き写すのではなく「換骨奪胎して」日本の実情に合わせて、文化に合わせて取り入れなければならぬ。しかも、女子教育については、欧米の家庭の様子を女性の目で十分に観察しなければ、その教育法の本質は見抜けないと述べています。女性の目で見ることの必要性がここに示されていて、それを実践したのが下田の女子教育の構想でありました。

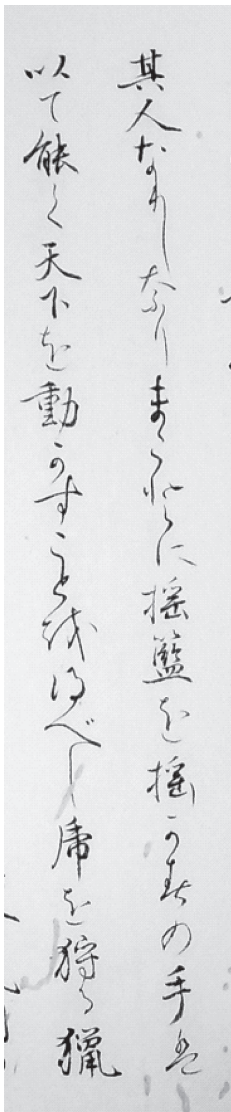
下田は明治三十二年に本学園、実践女子学園を創りますけれども、その後もさまざまな女子教育機関の創立にかかわっています。

翌明治三十三年（一九〇〇）には今の新潟青陵学園を興しておりますし、大正七年には現在の広尾学園、それから大正八年には淡海女子実務学校、現在の淡海書道文化専門学校を創り、それから逋信省附属明德女学校、愛国夜間女学校等、これらはすべて下田の創立というわけではなくて、請われて校長になったという場合もありますけれども、いずれにせよ、さまざまな学園等を創つたり、その実際的な運営にあたりしています。

つまり、この実践女子学園は女性の社会的地位の向上の拠点として、スタートとして創られた学園であって、実践さえよければいいという意図で創られた学園ではありません。我々はそういう下田の高い強い志を受け継ぎたいと思っております。もちろん、このシンポジウムもひとつの試みで、今は本当に女子教育機関が連携すべき時代にきていると思います。女性が具体的にどのよう社会参加をしていくのが問われる大事な時期である今こそ、

女子教育機関のあり方が問われていると思います。そのときに一私学だけではなくて、さまざまな立場の女子教育機関が連携して、最初は少しずつだと思えますけれども、大きな成果に向けて連携を図っていきたいというふうに思います。そしてそのひとつの中心に下田歌子研究所がなつていきたいと考えています。これも下田の理念から当然出てくることだと我々が思っている事柄です。

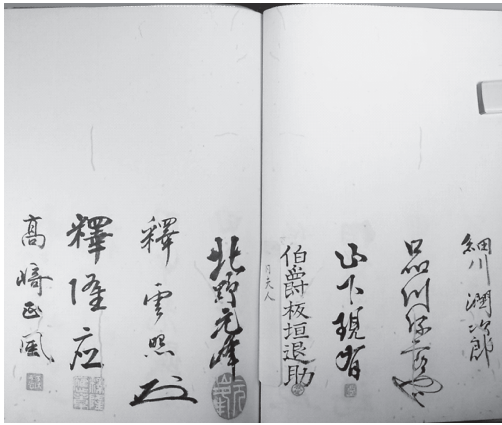
下田はヨーロッパから帰りまして、すぐ帝国婦人協会というものを設立し、みずから会長を務めますが、この設立の主意書に、羽入先生も触れてくださいました「播籃を揺がすの手は、以て能く天下を動かすことを得べし」という言葉があります。あるいは、「社会風潮の清濁は、その源、男子にあらずして、女子にあり」、あるいは「余等は爰に今中等以上の女子に對ひて云々するものにあらず」とあります。つまり、それを私たちは「中等以上の女子」をもう手助けする必要はないでしょう、中等以下の女



帝国婦人協会設立主意書
(部分)

性たちの教育を我々がやっていくのだ、と言っているわけです。「徳を高め智を進め」、あるいは「以て、自他の利益を謀らしめんが為に、漸次、其実力をも養はしめ、其の自活の道をも」というように「自活、自立」という言葉——ここに実践の校名の由来があるわけですから——を中心に活動していきます。

この写真は、帝国婦人協会設立主意書の下田歌子の自筆原本ですが、最後にこのような板垣退助をはじめとする賛同者の記名があり、ここにはお金については書いてありませんけれども、当然



帝国婦人協会設立主意書、賛同者による記名

ご寄付をいただいていると思います。

もうひとつここで紹介申し上げたいのは、この「播盤を播がすの手は、以て能く天下を動かすことを得べし」という言葉は、十九世紀のアメリカの詩人ウィリアム・ロス・ウォレスの詩で、何遍もリフレインされる言葉に由来していることは間違いないと思います。しかし下田歌子は明らかにこの言葉を援用しながらも、下田の文脈で——私はこれを「女性が社会を変える、世界を変える」というふうに言い直させてもらっているのですけれども——、その志をもつての言葉であることも間違いありません。この帝国婦人協会設立の主意書というのは、和漢洋を駆使した名文で、当然ウォレスを引いてもおかしくないのですけれども、その意味は、あくまで下田の使い方です。

この言葉と、これも羽入先生が引いてくださいましたけれども、「女性の清らかな特性と豊かな情操を以て社会の弊を正せ」という言葉は、当然建学の理念のキーワードとなるものです。これらを言葉どおりそのまま受け取ることもできますけれども、大事なことは、現在の社会状況を踏まえた上で、さらに具体化されるということだと思います。金科玉条のように守るのではなく、それを今の現実に当てはめて、そこから我々の教育の取り組みに生かしていかねければならない。そういうものとして受け止めてなくてはならないものだと思います。福井先生がおっしゃっていたことも同じ

趣旨かと思えます。

その点から、下田歌子研究所は生命維持装置のように下田の歴史的研究は行いつつ、しかしそれは、現在・未来において、女性たちが生き生きと活躍できる社会の実現のために役立つ歴史的研究でなければならぬと思っています。また、歴史的研究ばかりではなく、男女共同参画社会の実現と、女性のキャリア支援に関する活動に取り組んでいきたいと考えております。この七月一日をもって本学園に男女共同参画推進準備室が立ち上がっております。これは本年十一月一日に男女共同参画推進室になる、その準備室として、その取り組みも最後にご紹介しますが、その参画室との連携も図るということを強く考えています。もちろんこれは内部の連携ですけれども、それだけではなく、外部の女性公共機関、あるいは男女共同参画や女性のキャリア支援を推進する機関、あるいは個人との連携を積極的に、この研究所が図っていきたいと思っております。

最後になりますけれども、男女共同参画室の構想を本当に簡単に、お伝えしたいと思います。ひとつは学園教職員に関する現状把握です。現状把握がなければ何もなりません。二番目として、職員間の交流・学習を推進する。それから、管理職の学習会と意見交換。あるいは四番目として男女共同参画に関する調査・研究——ここに下田研究所を絡ませていただきます。あるいは五番目

として、男女共同参画推進に向けた職場環境整備。イ、ロ、ハ、ニ、ホと、緊急の課題が含まれています。六番に、男女共同参画社会に向けた大学教育。これは学生に還元していかなければなりません。そして七番、教職員組織は現在、女性教員比率をすべての学科で四割以上ということです。現在四割を達成しているところもありますけれども、すべての学科ではありません。それから女性職員に関しては、今50%を超えていますけれども、管理職比率は22.2%です。これを四割以上にはしたいということで、まづ足元について、女子大学としてきちんと共同参画に関する施策をするという確認をしつつ、並行して社会へのアピールを、この下田研究所も大いに連携して一緒にやりたいと思っています。男女共同参画社会の実現の中心になりたい、旗手になりたいと考えています。この下田の百年の長計はいまだに達成されておりません。福井先生がおっしゃるように、これは終わらないと思います。我々は常に原点を確認し、今を検証し、百年の長計の達成に全力を傾けていきたいと思っております。ご清聴ありがとうございます。ごうございました。(拍手)

伊藤——湯浅先生ありがとうございました。